

マルクスのオルタナティブ論

—マルクス思想の編年的考察ノート—

田中 史郎

はじめに

周知のように、マルクスが共産主義や未来社会にかんして述べている文言は多くない。こうした、いわゆるオルタナティブの問題にかんしては極めて禁欲的であったともいえる。『資本論』での冗長ともいえる実証例の掲載とその分析と比較すると雲泥の差である。

しかし、体系的ではないものの、それに関連する叙述を拾い出すことはできる。それを大まかに年代順に並べることにした。また、その際に、オルタナティブ論に不可欠な、未来社会の社会像とそれに至る移行論（革命論）に注目した。本稿は、マルクスの文言を拾い出すノート以上のものではない。だが、そうすることによって、マルクスのオルタナティブ論やその変遷が臍氣（おぼろげ）ながら見えてくるのではなかろうか。なお、ゴシックはマルクスからの引用である。

1 『経済学・哲学草稿』 1844年頃執筆 [26歳] (疎外論)

疎外された労働は人間から、①自然を疎外し、②自己自身を、人間に特有の機能を、人間の生命活動を、疎外することによって、それは人間から類を疎外する。すなわち、それは人間にとって類的生活を、個人生活の手段とならせるのである。……なぜなら、人間にとって、労働、生命活動、生産的活動そのものが、たんに欲求を、肉体的生存を保持しようとする欲求を、満たすための手段としてのみ現れるからである。

資本主義における労働を「疎外された労働」として捉えている。それは、①自然を生産のために手段化すること、②そして、人間のも手段化することになるという。こうした認識から、未来社会の像は「疎外」のない世界ということになる。

共産主義は否定の否定としての肯定であり、それゆえに人間的な解放と回復との、次の歴史的発展にとって必然的な、現実的契機である。共産主義はもともと近い将来の必然的形態であり、エネルギーな原理である。しかし共産主義は、そのようなものとして、人間的発展の到達目標——人間的な社会の形姿——ではない。

未来社会への移行論として、「否定の否定」というロジックが示され、また、それは「人間的発展の到達目標」ではないとされる。

前者は、『資本論』の「否定の否定」、後者は『ド・イデ』の運動論に繋がるとも読める。

*本書の岩波文庫版（城塚登、田中吉六訳）の出版は1964年である。つまり『資本論』などより後に出版されたのであって、『資本論』の解釈が必ずしも進まないなかで、初期マルクス・ブームをもたらすことになった。「疎外論」こそがマルクス主義の核心だということが語られたりした。

2 『ドイツ・イデオロギー』 1845～46年[27歳] (共産主義の定義)

これに対して共産主義社会では、各人はそれだけに固定されたどんな活動範囲ももたず、それぞれの任意の部門で、自分を発達させることができるのであって、社会が生産全般を規制しているのである。だからこそ、私はしたいと思うままに、今日はこれを、明日はあれをし、朝に狩猟を、昼に魚取りを、夕べに家畜の世話をし、夕食後に批判をすることが可能になり、しかも、けっして狩人、漁師、牧人、あるいは批判家にならなくてよいのである。(中略)

共産主義とは、…現実がそれに向けて形成さるべき何らかの理想ではない。…現在の状態を止揚する現実的運動のことである。この運動の諸条件は今、現にある諸条件から生じる。

見られるように、『ド・イデ』では共産主義社会の大まかなイメージが述べられている。

引用文前半では、きわめて、牧歌的な共産主義社会での人間像が描かれている。資本主義で局限化した精神的(頭脳)労働と肉体的労働の分離や分業の止揚が共産主義社会では遂げられているというわけである。これは、先の「疎外された労働」の止揚と同様な内容とも考えられる。

また、後半では、共産主義への歴史的な移行論(革命論)が示されている。マルクスは、それを一つの制度としてではなく、絶えざる運動として把握している。『経哲草稿』にも同様なことが述べられていた。

いずれにしても、抽象的・哲学的だが、オルタナティブ論において要と思われる、社会像とそれへの移行論が示されているといえよう。

*『ド・イデ』は、戦前にも翻訳は存在したが、岩波文庫版(古在由重訳)の出版は1956年である。先の『経哲草稿』と並んで、初期マルクス論の原点となった。

3 『共産党宣言』 1848年[30歳] (第2章 プロレタリアと共産主義者)

…最も進歩した諸国にあつては、左の諸方策が大抵一般に行使されうるのであろう。

1. 土地所有の廃止と地代の公共目的への充当。
2. 重度の累進課税。
3. 相続権の全面廃止。
4. すべての国外移民者と反逆者からの財産没収。
5. 国家資本をもち、排他独占的な国立銀行による、信用の国家の手中への集中。
6. 通信輸送手段の国家の手中への集中。
7. 国有の工場および生産用具の拡大。共同計画にしたがった荒廃地の耕作化と一般的な土壌改良。
8. 全員に対する平等な労働の義務化。産業軍、特に農業のための産業軍の創設。
9. 農業と工業の結合。農村部へのもっと平等な人口分散による、都市と農村との区分の段階的廃止。
10. 公立学校での全児童に対する無料教育。現在の形態での児童の工場労働の廃止。教育と産業生産活動との結合、等々。

かくて、発達の進行につれ、階級的差別が消滅し、すべての生産が、総個人の協力の手に集中されるならば、そのとき公的権力はその政治的性質を失う。元来、政治的権力なるものは、一階級が他階級を屈服するための組織的強力である。プロレタリアはブルジョワジーに対する戦闘の必要上、自ら一階級を形成し、革命によって自ら支配階級となり、そして支配階級として強制的に古い生産関係を廃絶するのであるが、その生産関係の廃絶とともに、階級対立の存在条件を廃絶し、階級全体を廃絶し、従ってまた、自らの階級的支配権をも廃絶するのである。

かくていよいよ、古いブルジョア社会の代りに、各人の自由な発達が**衆人の自由な発達の条件**となるような、**協力社会**が生ずるのである。

○ここ『党宣言』においては、党の具体的な政策方針と、その後の、社会の展望が示されている。その社会像は、階級的差別が消滅した社会、階級全体が廃絶した社会として示されている。

また、そうした社会への移行は上の諸方策が実現することを通してなされるとされる。

4 『経済学批判』の「序言」、1857～58年[39歳]（いわゆる「唯物史観の公式」）

大ざっぱにいて経済的社会構成が進歩してゆく段階として、アジア的、古代的、封建的、および近代ブルジョア的生活様式をあげることができる。ブルジョアの生産諸関係は、社会的生産過程の敵対的な、といっても個人的な敵対の意味ではなく、諸個人の社会的な生活諸条件から生じてくる敵対という意味での敵対的な、形態の最後のものである。しかし、ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対関係の解決のための物質的諸条件をもつくりだす。だからこの社会構成をもって、人間社会の前史はおわりをつけるのである。

『学批判』「序言」のこの引用文章の前には、おなじみの「土台—上部構造」図式を前提に、土台と上部構造との衝突から必然化する歴史社会の発展法則が示される。そして、アジア的、古代的、封建的、近代ブルジョア的という名称で、4つの時代区分が示される。

そこで注目されるのは、近代ブルジョア的生産関係（資本主義）は、諸個人の社会的な生活条件から生じてくる敵対的な形態の最後のものされている。この「最後のもの」を深読みすれば、それは、近代になって成立した自由権などを前提とした、形式的な平等に潜む「搾取」ということか？

また、近代ブルジョワ的生産関係までが「前史」として括られることにも注目が集まる。それまでの社会（前史）と未来社会（本史）との間に、これまでの時代区分とは異なる断絶線が存在していることが示唆されている。つまり、これまでの時代区分の、第5番目のものではないということであろう。そうだとすれば、これまでの経済的社会構成の進歩（「土台—上部構造」図式）とは異なった論理や動力や求められるということか？ともあれ、これは「前史—本史」図式といえよう。

*この「序言」は、マルクスが哲学や法学に限界を感じ経済学の研究に本格的に着手するさいのメモ的な文書である。「わたくしの研究にとって導きの糸として役立った一般的結論は、簡単に次のように公式化することができる」と記されているのは、その意味であろう。

5 『資本論』第1巻、初版、1867年刊行[49歳] [第2版.1873年刊行。フランス語版.1872～75年刊行]

5-1. 『資本論』初版の「序文」（リンゴ箱史観）

もしも、ドイツの読者がイギリスの工業および農業労働者たちの状態を見て…楽観主義的にドイツでは辛うじてそんなに悪くないと考えて彼自身を慰めるとすれば、私ははっきりとその人に告げなければならない、「人ごとではないのだぞ！」と。

本質的に、それは資本家生産の自然諸法則から結果する社会的諸対立の発展の程度が高いまたは低いことについての問題ではない。…それは鉄の堅く強い必然性をもって避けられない結果に向けて働くこれら諸傾向の問題である。産業的により発達した国は、あまり発達してない国にとっては、その国自身の

未来の姿を示すにすぎない。

ここでは、一步遅れた国も鉄の必然性をもって先進国と同様になることが述べられている。つまり、世界史というリング箱のリングは、やがてはすべて赤く色づくということ。ここから想定されるのは全ての国が遅かれ早かれ資本主義になる」ということであり、したがってその後に、いわゆる「世界先進国革命」が...ということ。こうした移行論を想定しているのかもしれない。これを「リング箱史観」ということが出来るかもしれない。

5-2. 『資本論』第1巻、第24章、第7節 (否定の否定論)

資本制的生産様式から生まれて来る資本制的取得法則は、したがって資本制的私的所有は、個人的な、自分の労働にもとづく私的所有の第一の否定である。しかし、資本制的生産は一つの自然過程の必然性をもってそれ自身の否定を生み出す。それは否定の否定である。この否定[共産主義]は、私的所有を再現するのではないが、まさに、資本制的時代の獲得物の、すなわち協業と、土地と労働そのものによって生産される生産手段との共同占有との、基礎の上に個人的な所有を再建する。

先の『経哲草稿』にもあったが、この「否定の否定論」の議論を簡略化すれば、①自分の労働にもとづく私的所有、②資本主義的な私的所有、③個人的所有、となる。そして、③を①の「否定の否定」(肯定)と捉え、自分の労働にもとづく私的所有の復権を移行論と考えるといえる。

いわゆる、市民社会論(平田清明など)の論拠となった論理である。所有論的なアプローチともいえる。

もっとも、これに対して、モリスは、①の部分について、それは「個人的な私的所有」の原理ではなく、「協同の原理によって」なされていたことを強調する。したがって、その否定の否定である③も、「協同」(共同)の原理が求められるというロジックになる(大内秀明も同様)。

いずれにしても、先の「前史-本史」図式と、この「否定の否定」論を、どのように理解すべきか、定説はない。

5-3. 『資本論』第3巻(必然性の国、自由の国)(1865年頃執筆。1894年、エンゲルスにより刊行)

じっさい、自由の国は、窮乏や外的な合目的性に迫られて労働するということがなくなったときに、はじめて始まるのである。(中略)

社会化された人間、結合された生産者たちが、盲目的な力によって支配されるように自分たちと自然との物質代謝によって支配されることをやめて、この物質代謝を合理的に規制し自分たちの共同的統制のもとにおくということ、つまり、力の最小の消費によって、自分たちの人間性に最もふさわしく最も適合した条件のもとでこの物質代謝を行なうということである。しかし、これはやはりまだ必然性の国である。この国のかなたで、自己目的として認められる人間の力の発展が、真の自由の国が、始まるのである…。

ここでは、未来社会を、共同的統制のもとにおかれた合理的な物質代謝による社会として提示するものの、それをも必然性の国として位置づけている。つまり、これでは本質的に不十分だということであろう。そして、それを止揚した自由の国では、合目的性に迫られた労働が無くなる、言い換えれば、自己目的としての人間の力(労働)の発露に満たされるということ。労働の、手段から目的への転換がなされるとき、自由の国が始まるということである。この観点は、次の「ゴータ綱領批判」に受け継がれている。

6 「ゴータ綱領批判」 1875年[56歳]

この共産主義社会[の第1段階]は、あらゆる点で、経済的にも道徳的にも精神的にも、その共産主義社会が生まれでてきた母胎たる旧社会の母斑をまだおびている。…個々の生産者はこれこれの労働を給付したという証明書を受け取り、この証明書をもって消費手段の社会的貯蔵のうちから等しい労働量が費やされた消費手段を引き出す。個々の生産者は自分が一つのかたちで社会に与えたのと同じ労働量を別のかたちで返してもらうのである。ここでは明らかに、商品交換が等価物の交換であるかぎりでの交換を規制するのと同じ原則が支配している。…ここでは平等な権利は、まだやはりブルジョワ的権利である。

しかし、ある者は肉体的にあるいは精神的に他の者より優れており、したがって同じ労働時間でより多くの労働を給付し、またより多くの時間で労働しうる。…かかる平等の権利は不平等の労働に対する不平等の権利である。…すべてのかかる不都合を避けるには、権利は平等ではなくて、不平等でなければならない。

共産主義社会のより高次の段階において、すなわち諸個人が分業に奴隷的に従属することがなくなり、それとともに精神的労働と肉体的労働との対立もなくなったのち、また、労働がたんに生活のための手段であるだけでなく、生活にとって真っ先に必要なこととなったのち、また、諸個人の全面的な発展につれて彼らの生産能力も成長し、協同組合的な富がそのすべての泉から溢れるばかりに湧き出るようになったのち—その時はじめて、ブルジョア的権利の狭い地平は完全に踏み越えられ、そして社会はその旗にこう書くことができる。各人からはその能力に応じて、各人にはその必要に応じて！

共産主義社会 [の第1段階] (粗野な共産主義) においては、労働に応じた見返りを得るが、それは商品交換と同様な原則であり、ブルジョワ的権利だとされる。つまり、権利は平等ではなくて、不平等でなければならない、と。余談だが、昨今の「同一労働・同一賃金論」や「同一価値労働・同一賃金論」は、ブルジョワ的権利の延長線上の思考であることを自覚すべきである。

これに対して、共産主義社会の高次の段階においては、各人からはその能力に応じて働き、各人にはその必要に応じて得ることが出来る社会が到来すると考えられている。

先の「必然性の国、自由の国」論の論理と同様な内容だといえる。

*そもそも「ゴータ綱領」とは、「ドイツ労働者協会 (ラッサール派)」と「社会民主労働者党 (アイゼナハ派)」との合同による「ドイツ社会主義労働者党 (ドイツ社会民主党)」の結成される際の綱領をさす (同大会は1875年、ドイツ・ゴータ Gotha でなされた)。マルクスは、その綱領がラッサール派への譲歩だとして、「批判」を展開したのである。

7 「ザスーリチへの手紙」 (草稿) 1881年[62歳]

ロシアの「農村共同体」は、自己の基礎である土地の共同所有を発展させることによって、…近代社会が指向している経済制度の直接の出発点となることができる。それは自殺することから始めなくても、生まれ変わることができる。…資本主義制度を経過しなくても、手に入れることができる。(中略)

もしも、農村共同体に自由な飛躍を保障するために、革命が全力を集中するならば、農村共同体は、まもなく、ロシア社会を再生させる要素として、資本主義制度によって隷属させられている諸国に優越する要素として、発展するであろう。

ここでは、ロシアの農村共同体は、資本主義制度を経過しなくても、未来社会 (共産主義) を手

に入れることができると述べられている。

先の『資本論』初版「序文」での「リンゴ箱史観」とは対照的である。つまり、いわゆる先進国革命論から、辺境革命論（周辺革命論、共同体革命論）に方針転換したのか。

*ザスーリチは、ロシアのナロードニキ革命家。彼女は、『資本論』を読み、ロシア農村共同体の位置づけについて、マルクス当てに手紙を送った。その返書が「ザスーリチへの手紙」である。

この手紙は、「第1草稿」とも呼ばれるが、実は投函されていない。その後、第2、3、4草稿が書かれ、実際にザスーリチに返書として出されたのは内容が第4草稿とほぼ同じのものであり、そこでは上のような問題についてはさほど明確には述べられてはいない（実際に出された手紙には、「こういうわけで、『資本論』に示されている分析は、農村共同体の生命力についての賛否いずれの議論にたいしても、論拠を提供してはいません。」と述べるに留まっている）。

8 「共産党宣言、ドイツ語版序文」1882年[63歳]（エンゲルスによる再録、1890年）

ロシアの農村共同体は、...それは共産主義的な共有のより高度の形態に、直接に移行できるだろうか？ それとも反対に、...解体過程を辿らなければならないであろうか？ この問題にたいする今日あたえうる唯一の解答は、...。現在のロシアの土地所有は、共産主義的発展の出発点となりうる。

ほぼ最晩年の文書だが、ここでは、ロシアの農村共同体は、その解体、すなわち資本主義化を経ることなく、共産主義への出発点となる、と明確に述べられている。先のザスーリチへの手紙（草稿）と同趣旨の内容である。

マルクスは、ザスーリチへの返書においては、こうした点について結果的（第1草稿を出さなかったので）に曖昧にしたままだった。だが、この「ドイツ語版序文」においては、逡巡の末にこうして点について明確にしたものといえる。マルクスにおける未来社会に至る移行論（革命論）の最終の見解が示されている。

若干のまとめ

マルクスにおけるオルタナティブ論の両輪である未来社会の社会像とそれに至る移行論（革命論）は、以下のように纏められるのではないか。

まず、未来社会の社会像について。それは、『経哲草稿』や『ド・イデ』の頃にあっては抽象的で哲学的であったが、その後には内容が変更されたというより、進化したといえよう。すなわち、『資本論』の「必然性の国、自由の国」論、および「ゴータ綱領批判」の高次の共産主義社会論として結実したのではないか。当然ながら、労働の問題を軸にして、構想されている。

次いで、未来に至る移行論（革命論）について。『経済学批判』「序言」の「前史—本史」図式、『資本論』の「否定の否定」論など、明確に規定できない点があるが（これから立ち入った考察が必要だが）、『資本論』初版「序文」の先進国革命論（リンゴ箱史観）が一つの到達点であるといえる。だがその後、晩年にはこれを翻し、いわゆる辺境革命論（周辺革命論、共同体革命論）に転換していったのではないか。これが明確に示されたのが、「ザスーリチへの手紙」と「共産党宣言、ドイツ語版序文」ということが出来る。

こうした整理が可能ならば、これをどのように受け止め、さらに、どのように発展させるかは、今後の課題であろう。